

# 二重目的語構文と与格構文をめぐって

## —構文指導における理論と実践—

中川 右也

### 1. はじめに

教室で文型を教える際、二重目的語構文(double object construction)と与格構文(dative construction)とが相互に書き換え可能であると指導する。しかしながら、両者の書き換えは常に可能とは限らず、機械的な書き換えが許容されない事例が存在する。そうした事例について、系統的な説明を試みることに、ならびに、その説明を通して、構文の背後にある話者の認知能力を明示することが、本稿の目的である。

### 2. 二重目的語構文から与格構文への書き換え

教育現場では、しばしば二重目的語構文から与格構文への書き換え問題を取り上げる。その際には、通例、to与格構文をとる動詞をgive型、for与格構文をとる動詞をbuy型と分類し、方向性を含意する動詞はgive型に、受益性を含意する動詞はbuy型になると教えて、学習者への定着をはかる。しかし、この教え方の問題点は、例えば「教えてあげる」という日本語に引きずられて、slow learnersがteachなどの動詞をも、受益性を含意する動詞と見なしてしまう場合があるということである。そうしたslow learnersの躓きを避けるためにも、give型動詞は三項動詞、つまり、相手(IO)の存在なしでは行為が行えない動詞であり、buy型動詞は二項動詞にもなりえる動詞、つまり、一人でもその行為を行うことが可能な動詞であると教えた方が効果的であると考えられる。<sup>\*1</sup>

### 3. 形態と意味

ポリンジャーの原則によれば、言語表現は、形式が異なれば意味も異なる。従って、二重目的語構文と与格構文は、単に、文法的な形式を異にするだけでなく、意味においても何らかの相違を有するはずである。教育現場で書き換え問題を取り上げる際には看過されがちなことであるが、この節以降では、二重目的語構文と与格構文との相違を、主に意味論

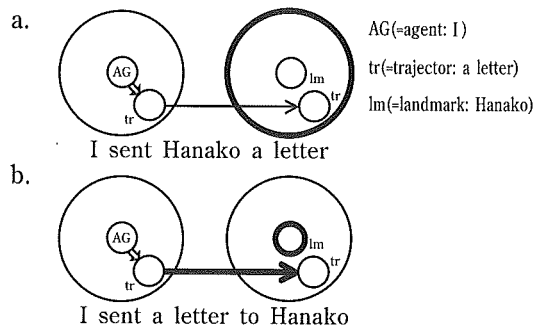
と語用論の二つの観点から考察したいと思う。次の例文を参照されたい。

(1) a. ??I sent Hanako a letter, but she hasn't received it yet.

b. I sent a letter to Hanako, but she hasn't received it yet.

(1) a が容認し難くなる理由は、Lakoff and Johnson (1980 : 128)の言う「近接は影響の強さ」と深く関係がある。二重目的語構文においては、IO has DO の関係が成り立つのに対し、与格構文は、動詞とIOが隣接していないため、動詞のIOに対する影響が弱く、従って、IOがDOを受け取ったという含意がなされないのである。<sup>\*2</sup>

(2)



(2)に示した認知構造aとbを比較してみると明らかのように、aではlmがtrを受け取るということがプロフィール(profile)されるのに対し、bではtrの移動がプロフィールされる。

また、(2)aの二重目的語構文は、自分で直接手紙を送ったという意味を持つものに対し、(2)bの与格構文は、第三者を通して間接的に手紙を送ったという意味を持つこともある。

上述の認知構造を理解すれば、次の(3)aの英文がなぜ容認不可能であるかがわかるであろう。

(3) a. \*I sent Tokyo a letter.

b. I sent a letter to Tokyo.

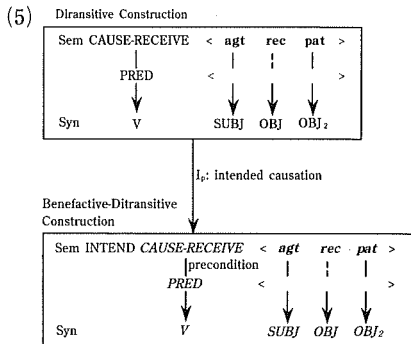
つまり、意味構造において、二重目的語構文の場合、IOが受容者(recipient)を表すので、IO has DOの関係が成り立ち、従って、(3)aのような英文は容認されない。これに対し、与格構文の場合、IOが着点(goal)概念表示語であるtoと共に起するため、DOがIOへ移動する過程がプロファイルされ、IOがDOの到達する場所として認識されるため、(3)bのような英文は容認されるのである。

#### 4. 意味拡張された二重目的語構文の特性

前節で述べたように、通例、二重目的語構文においてIOは受容者を表し、従って、IO has DOの関係が成り立つのであるが、IOがDOを受け取ったことを必ずしも含意しない創造動詞の例がある。

(4) Hanako baked Taro a cake, but she failed to get it.

(4)の文は容認可能である。例えば、花子が太郎の家に向かう途中でケーキを落とし、台無しにした場合が挙げられる。この理由に関して、Goldberg (1995: 10)は、「実際の移動」という中心的意味から「意図的移送(intended transfer)」へと意味拡張されたものだからであると論じている。



(Goldberg 1995: 77)

この創造動詞の意味の特性は、それほど不思議ではない。元々移送を含意しない創造動詞は、移送の成功を中心的意味とする二重目的語構文と結びつくことにより、「移送の意図」を含意するようになるからである。

#### 5. 情報構造の違い

二重目的語構文と与格構文との相違は、情報構造(information structure)の違いにも見受けられる。次の英文を参照されたい。

(6) \*Taro gave Hanako it.

(6)の文が容認不可能である理由は、談話(discourse)における情報構造は、旧情報(old information)

から新情報(new information)への配列となるのが自然だからである。よって、既に提示された旧情報であるitは文末に置けないのである。英語には、文末に新情報の焦点を当てる、文末焦点の原理(principle of end-focus)が働く。

(7) a. Taro gave Hanako a book.

b. Taro gave a book to Hanako.

(7)aは、文末にa bookが置かれていることから、「何を」に焦点が当てられ、疑問文What did Taro give Hanako?に対応する文であり、(7)bは、文末にHanakoが置かれていることから、「誰に」に焦点が当てられており、疑問文Who did Taro give a book to?に対応する文であることがわかる。<sup>\*3</sup>

#### 6. 情報構造という概念の例外的事象

情報構造という概念では解決できない問題も存在する。

(8) John gave a book to the boy.

(Kuno 1979: 281)

文末焦点の原理に従えば、旧情報である定冠詞を用いた名詞the boyを文末に置いた(8)は容認不可能となるはずであるが、(8)は容認可能な文である。この理由に関して、Kuno (1979: 282)は次のように説明する。二重目的語構文は、話し手が意図的に情報構造に基づいて操作した文であるのに対し、与格構文は、プロトタイプであるがゆえに、話し手が意図的に情報構造に違反したのではなく、必然的に旧情報が文末に置かれた結果なので、(8)の英文は容認可能となる。<sup>\*4</sup>

しかし、上記の説明のみでは不十分である。

(9) Taro gave Hanako that.

(9)は(6)と同様、二重目的語構文であり、旧情報である代名詞が文末に置かれているが、容認可能となる。この事実を十分に説明するためには、統語上の操作である接語化規則(cliticization rule)の考え方が必要になろう。通例、接語化とは、アクセントを置くことのできない定代名詞(itやthemなど)が、統語的役割を付与する動詞や前置詞などと一体化し、その一部のように発音される、統語上の操作を指す。しかし、thisやthatなど、対照性を示す代名詞にはアクセントを置くことが可能であるため、接語化の操作を行う必要性がないのである。

#### 7. メタファー的拡張例

二重目的語構文の意味拡張であるメタファー的表

現においては、与格構文への書き替えが容認されない。

(10) a. Taro gave Hanako a kiss.

\* b. Taro gave a kiss to Hanako.

なぜなら、to 与格構文では、(2)で示した認知構造のように、移動経路 (path) がプロファイルされるのであるが、物理的移動を含意しないメタファー的表現が、移動経路をプロファイルすることは不自然だからである。しかし、様々な要因が重なれば次のような例外的事象も存在しうる。

(11) Bill gave Mary a kiss and she was so happy that she gave one to everyone she ran into that day. (Goldberg 1995 : 97)

この文中にある代名詞 one は、a kiss を指しているにもかかわらず、(11)の与格構文は容認可能である。文末重心の原理 (principle of end-weight) と文末焦点の原理が働き、与格構文が生成される契機となったのだが、他動詞 kiss と意味的に等価の名詞 a kiss が代名詞 one に代用されることによって、その性質が希薄化され、その結果、容認可能な文になったのである。

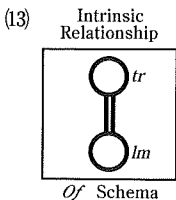
## 8. 二重対格動詞としてのask

動詞 ask は、これまで述べてきた二重目的語構文のような授与動詞ではなく、二重対格動詞 (verbs with the double accusative) であるという点で異なる。

(12) a. May I ask you a favor?

b. May I ask a favor of you?

slow learners にとって、なぜ ask は与格構文にする際、前置詞 of を要求するのかが理解し難いようである。その理由として、日本語訳である「あなたにお願いをしてもいいですか」の「あなたに」に対応する語が、なぜ of になるのかが納得できていないからであろう。



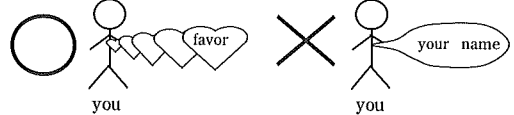
(Langacker 1992 : 298)

Langacker (1992 : 296) によると、前置詞 of の中心的語義は、(13)の図に示されているように、2つの事物 (entity) である tr と lm との本質的な関係であるとしている。このスキーマ (schema) に示され

た tr と lm の関係が希薄化されると、tr が lm から「分離」を意味することになる。

先ほどの例では、favor (好意) は、you の内面的な部分から引き出されるものである。前置詞 of が要求されるのである。不定詞の意味上の主語に前置詞 of が要求される場合は、形容詞が不定詞の意味上の主語の性格などを意味する場合であるのもこのためである。

(14)



slow learners に対しては、文法的な説明をした上で、(14)のような図などを使って、視覚的に提示するのも理解の手助けになろう。また、なぜ May I ask your name of you? のように、name などは与格構文に不適切なのかもわかるであろう。<sup>※5</sup>

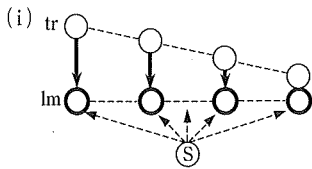
## 9. おわりに

本稿では、二重目的語構文と与格構文との相違を、構文レベルから考察してきた。本稿では論じなかったが、教室で構文を教える場合、構文指導にとどまらず、語彙指導へと発展させることも可能である。例えば、deny は、第三文型では「否定する」、第四文型では「与えない」を意味し、一見すると両者の間には何の関連性もないように思われる。しかし、二重目的語構文の知識を背景として、第四文型の deny は、IO が DO を受け取ることに対し「応じない」ということなのだと教えれば、語彙の定着にもつながるであろう。文法指導においても、語彙指導においても、なぜそのような規則が成り立つのか、あるいは、なぜそのような意味になるのかを、教師が説明することによって、学習者の理解を深めることができるのではなかろうか。

[注]

※1 write は send の意味も含意しているため、ここでは「書き送る」と解釈する。

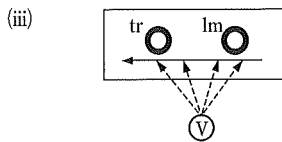
※2 前置詞 to は、同じく方向性を示す for との対比において、tr が lm に到達したことを含意するが、ここではその意味を持たない理由として、物理的移動の経路がプロファイルされているため、次の図(i)のように到達点までの過程を話し手が心的走査 (mental scanning) していると考えられるからである。



Andrea Tyler and Vyvyan Evans(2003 : 149) は、前置詞 to の基本語義は経路を含まないとしているが、この分析にはいくつかの問題点がある。

(ii) She looked to the left. (Ibid.)

第一に、前置詞 to が経路を含意しない証拠として挙げられた例文(ii)も、次の図(iii)が示すように、視点移動 (scanning) がなされており、そこには経路の存在が必要不可欠だからである。



(山梨 2000 : 58)

確かに、こうした表現は、静的な位置関係を示しているかのように思われるが、我々の認知過程を考察してみると、lm (= her) が tr (= left) を位置づけるための参照点として機能しており、認知主体 (viewer) の動的な視点移動が存在する。

第二に、前置詞 to が移動の開始を表す動詞 (e.g. depart, leave) と共起しないのは、経路が to に含まれているため意味的に逸脱するからに他ならない。一方、go などが前置詞 to と共起できるのは、その経路を含意できるからである。

(iv) \* a. They departed to Tokyo.

(\*彼らは東京まで出発した。)

b. They went to Tokyo.

(彼らは東京まで行った。)

※3 文末焦点の原理に加えて、前置詞 to の力の作用も関与して、例文(7)b の Hanako が焦点化されている。

※4 二重目的語構文と与格構文の派生については、様々な議論がなされている。この両者の獲得過程の研究については、Pinker(1989)参照。

※5 安藤(2008 : 74)では、Ask him his name. を Ask his name of him. に変えることはできないとしているが、次のような文も非常にまれではあるが存在する。

“Remember, do not ask his name of him,”

(Will Henry, *I, Tom Horn*)

前置詞 of の基本語義である「分離」の意味から、この文における ask は「聞き出す」という解釈になろう。

#### 参考文献

安藤貞雄 (2008)『英語の文型』開拓社、東京。

Andrea Tyler and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of Prepositions: Spatial scenes, embodied meaning and cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.

Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. University of Chicago Press, Chicago.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.

Kuno, S. (1979) “On the Interaction between Syntactic Rules and Discourse Principles,” G. Bedell, E. Kobayashi, and M. Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics*, 279-304. Kenkyusha, Tokyo.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago.

Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol*, Walter de Gruyter, Berlin and New York.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2: *Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.

Langacker, Ronald W. (1992) “Prepositions as grammatical (izing) elements,” *Leuvense Bijdragen* 81, 287-309.

中村芳久 (2001)「二重目的語構文の認知構造」『認知言語学論考』No.1, pp.59-110. ひつじ書房、東京。

Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition*, MIT Press, Cambridge.

山梨正明 (2000)『認知言語学原理』くろしお出版、東京。

(高槻中学・高等学校)

ご意見、ご感想は下記宛先までお願いいたします。

nakagawa@takatsuki.ed.jp